

短歌の「朗読」、音声表現をめぐって（２）戦時下の「愛国詩朗読」への道

坪井秀人『声の祝祭—日本近代詩と戦争』（名古屋大学出版会一九九七年）は、明治期から湾岸戦争まで、日本の詩人たちが戦争にどうかかわったのかを検証する労作である。第Ⅰ部序章では、詩の持つ「音声性への志向」の様態を民衆詩派の詩の考え方と明治期の『新体詩抄』のそれと比較検討する。第Ⅲ部第九章「声の祝祭—戦争詩の時代」第十章「朗読詩放送と戦争詩」では、＜大東亜戦争＞下、モダニズムが衰微してゆく過程で、「朗読詩運動などに代表されるように音声性が視覚性を駆逐していく過程」、「日本近代詩の表現が戦争詩にゆきついてしまうことの意味を表現史的問題として考察」する。さらに、戦争詩の朗読が「ラジオ放送というメディアとどのように連携していたかについて」も検証する。巻末の「朗読詩放送の記録（表）」は圧巻であり、その物語るところは深く、重い。

坪井によれば、明治期の「朗読」の嚆矢は、一九〇二年八月、与謝野鉄幹、平木白星、児玉花外、蒲原有明らによる朗読研究会（於新詩社、後に韻文朗読会と改称）であり、一〇月の会には鷗外、涙香、信綱らも加わり、九〇〇名の来会者があったが、詩吟的「朗詠」が主流であったという。一九二〇年代に入ると、口語自由詩運動を展開した白鳥省吾・福田正夫ら民衆詩派詩人と幅広い詩人たち、小山内薫らの演劇人、山田耕筰らの音楽家との朗読会が開催されるようになり、一九二五年三月に放送を開始したラジオが大きな役割をはたすことになる。

最近、手にした照井櫻三『詩の朗読—その由来・理論・実際』（白水社 一九三六年。著者は読み手としても著名だった声楽家）によれば、「詩の朗読」とは、新体詩の朗読、（漢詩の）詩吟とも異なり「詩藻の美と力と諧調とを表出して、その詩の精神と情趣とを聴者が十分に味解し得るやうに明瞭に読み上げることであり」と定義し、「とりわけ、散文詩、口語で書かれた自由詩等に於て、朗読が最も効果的であり、かつ最も適切であると謂はざるを得ない」とする。一九二〇年代、関西では、著者らが中心になって「詩と音楽の会」が続けられ、放送開始後は、単発的に大阪中央放送局（JOBK）の「詩の朗読放送」が始まっている。島崎藤村、西条八十、三木露風、高村光太郎、北原白秋らの詩が、著者照井をはじめ、富田碎花、岡田嘉子、東山千恵子らによって朗読されていることがわかる。本書では、朗読技術としての発声・発音・心理を基盤に抑揚・間合い・句切りなどを作品に即して詳説する。朗読に適した詩のアンソロジーが付され、藤村「椰子の実」、白秋「落葉松」、春夫「秋刀魚の歌」、賢治「永訣の朝」などが並び、戦時色は薄い。NHK「番組確定表」によれば、「詩の朗読」は時間帯を変えながら、オーケストラによる伴奏や歌唱とともに放送されることが多かった。では、戦争詩の朗読運動の理念となった「国語醇化」「戦意高揚」への道筋をたどり始めたのは何時ごろからだったのだろうか。

一九三六年十一月には、上記 JOBK は退廃的な歌謡曲を浄化しようと「国民歌謡」番組の放送を開始した（一九四一年二月「われらのうた」、一九四二年二月には「国民合唱」と改称。参照「年表」『日本放送史・別巻』一九六五年。櫻本富雄『歌と戦争』アテネ書房 二〇〇五年 三〇頁）。一九四〇年「紀元二六〇〇年奉祝」、一九四一年一月二日「宣戦布告」を経て、詩歌朗読運動も大きく転換を迫られることになる。高村光太郎「十二月八日」は次のように始まる。

記憶せよ、十二月八日。

この日 世界の歴史 あらたまる。

アングロ・サクソンの主権、

この日 東亜の陸と海とに 否定さる。

（内野光子『ポトナム』2008年4月）

